

第29号
平成23年4月



もう一つの道

情報は、うのみにせず、注意深く徐々に試して下さい。

山田整骨院
熊本市出水4-25-1
096-364-7611
<http://yamadasu.com/>
E-mail:yamadasu@opal.ocn.ne.jp

東日本大震災の被災者の 方々にお見舞い申し上げます

大地震、大津波、原子力発電所の放射能と未曾有の大惨事が起こっています。原爆投下と終戦を克服した日本国民は、今回の惨事も克服します。日本国民は一致団結して復興に努めましょう。

広島と長崎で2度被爆して 91才で健在な方が熊本にいます

2,3ヶ月前2度も原爆に会った日本人と揶揄したBBC放送のテレビ番組が問題となりましたが、熊本の丹後喬介さんも同じく2度被爆しました。しかし、91才でなお健在です。

昭和20年8月6日、爆心から3、5km離れた三菱重工広島造船所の工場で、原子爆弾の爆風に押し倒されました。幸い工場のストレート葺きの壁により、熱波及び光波の直接の爆射を免れることができました。市内中心の方は何もない焼け野原になっていました。爆心地近くの様子はまさに地獄絵図そのままだったそうです。長崎造船所の技師だった丹後さんは広島に派遣されていたのですが、被爆したその日に、広島の郊外にある九州に近い方の駅から出る列車に乗って、翌日長崎にたどり着きました。翌々日の9日、長崎工場の現場に出勤して、午前11時2分ピカッと来た瞬間、額が熱く感じて何秒かしてものすごい爆風でなぎ倒されるように飛ばされました。そこは爆心地から3km離れた工場の中でしたから下痢くらいの症状で済んだということでした。「2回も被爆して放射能障害の後遺症はなくて済んだのですか」の質問に対して、「放射線障害を受けた人というのは、放射性物質を含んだチリを多量に吸い込んだ人みたいですね。私は幸い、職務の関係で広島に長時間留まることもなかったし、被災地で救援活動などに動員されることもありませんでしたからね。そのせいで何事もなく済んだのか、昭和十六年頃からは西式健康法を実践しておりましたから、そのお蔭もあったと思います。」丹後さんは終戦後2,3年長崎で過ごし、その後熊本へ帰ってきました。昭和48年頃より西式健康法の指導、普及活動に専念し、現在熊本県西会会長、著書として「超健康法」があり、毎月自宅で定例講習会を主催しています。

死の灰と生体一者.....西勝造

これは昭和29年ビキニ島の水爆実験により第5福竜丸が被災した事件に際して、西勝造先生が月刊西医学昭和29年5月号に寄稿した文章です。

「ビキニ島の水爆実験は、全人類を死の恐怖にたゞきこんだ。そしてこの所謂原爆病に対する処置法に於いて、現代医学は周章狼狽、完全に手のつけようもない状態で、只、皮膚の手当、胃腸障害と云うように、皮膚科によるか、外科か内科か、泌尿科か、その帰趨を知らない。もともと原子病に限らず疾病そのものは、心身一者としての生体を患うもので、従って一毒の病因も体質により状況によっては、万病の症状を呈し来るものである。これに対して単なる対症療法としては奏効する道理はないのである。.....中略.....。広島と長崎に原爆が投下された際、生き残った被害者達が、悲しくも醜き痕跡を残したが、これも同程度の被害者である西会会員で、私の指導により、幸にも焼痕を軽くしたものも少なくない。特に焼夷弾被害の場合、成績良好の事実は、何物を物語るかである。超新的兵器に向って対症療法的医学の一考すべき時代到来の秋(とき)である。」

原爆症の実体.....土本重

これは昭和36年12月号の西医学で特集した死の灰の科学に寄せた土本医博(東大医学部卒)の一文です。

「私は広島原爆当時、広島市周辺の石内村に疎開して開業中であり、しかもその後数ヶ月にわたって被爆者の治療に従事した関係上、広島原爆以外の原爆症を知らないのを.....読者は諒とせられたい.....中略.....。その後私が広島に進出して開業し、厚生省より原爆医療機関として指定されて以来、原爆患者を現代医学的に取り扱った数は二十名をこしている。彼等に西式をすすめても、これを好まない人々には強制することができないので、やむなく治療方針にしたがい、現代医学的には十分に治療しているつもりである.....中略.....原爆症そのものの回復は容易でない。.....中略.....。つぎの例をもってすると、西医学は原爆症の経過にも相当の好影響を与えるであろうことを認めざるをえないのである。広島三浦弁護士は市内で被爆し、その後発熱、粘血便下痢、出血、白血球減少症等の重篤症状を呈し、一時は死を危ぶまれた程であったが、生食、柿の葉のシボリ汁、六大法則、風呂および温冷浴の励行によって、さしもの難病を克服した。そして七十歳余の今日、さらに豊饒たることは広島法曹会に西医学の特異性を十分に示しておいて、いまなお快い語り草になっている。略。」